

百草園

2月22日（火） 晴れ

★ この日も快晴、空気はまだ冷たいが風がないのでまずまずの散策日和である。田無駅 13 時 2 分発の電車に乗り、玉川上水駅でモノレールに乗り換えて 13 時 52 分に万願寺駅に到着した。

★ 万願寺駅のすぐ前を国道 20 号の日野バイパスが走っていて、それを横断して最初の角を右折して右側 3 軒目が土方歳三生家跡である。新選組副長・土方歳三の生家は 300m ほど離れた石田寺せきでんじの北方にあったが、歳三が 12 歳の時に長雨による増水で多摩川・浅川の堤防が決壊したときに被災して、残った母屋や土蔵をここに移築した。歳三は 28 歳で上洛するまでの青春時代をここで過ごした。

生家はずっと歳三のころのままだったが、1990 年に建て直しが行われ、家の一部を資料館として開放した。その後 2005 年に 3 倍の広さに増築され、展示資料も拡大された。現在は歳三の兄である土方喜六の子孫の土方愛さんが館長である。

資料館は毎月第一・第三日曜日の正午から午後 4 時までしか開館していないので、我々は門の外から建物を眺めただけであった。門のすぐ近くに土方歳三の胸像が立っている。



土方歳三資料館



土方歳三の胸像

★ 日野バイパスを新宿方面へ 200m ほど行き、石田大橋の前を右折して 300m ほど行くと石田寺がある。山門を入りすぐ右手に土方歳三の墓がある。土方家の墓の右隣に歳三の墓があり、墓前に函館戦争のときに写した肖像写真が飾られている。

このお寺は土方家のお墓だらけである。街中を歩いていても土方さんの家が多く目に付く。

山門のすぐ側に大きなカヤの木がある。樹齢 400 年、樹高約 26m、目通り幹囲 4.2m の大木で、青空に向かってスックと立っている姿は清々しい。



石田寺山門



土方歳三の墓



石田寺のカヤの木

- ★ 石田寺の隣に都立日野高校があり、日野高校の塀に沿って行くと浅川の土手である。浅川は陣馬山を水源とし、八王子市と日野市を流れ、聖蹟桜ヶ丘付近で多摩川に合流する。水量は多くないが、春の陽光を浴びて川面がキラキラと輝いている。



浅川



新井橋 右はモノレール

- ★ 新井橋を渡り住宅街の中を歩く。程久保川を渡り、京王線の踏切を渡ると川崎街道に出る。川崎街道から先が多摩丘陵の急な登りとなる。20分ほど息を弾ませながら登りやっと坂が緩やかになると右手に七生緑小学校がある。この学校は8年連続でNHK合唱コンクールに優勝した合唱の名門校である。

小学校の向かいに三角点公園がある。ここには、この辺りで最も高いといわれた丘がそびえていて、明治29年に陸軍陸地測量部が測量のための三角点を設置した場所だという。三角点公園の角を左折して10分ほど歩くと百草園に到着した。

- ★ 江戸時代の享保年間（1716～）、小田原藩主大久保侯の室であった寿昌院が松連寺を再建し、多摩丘陵の地形を活かして庭園を造ったのが百草園の始まりである。四季それぞれに花が咲くが、約50種500本の梅が有名である。「寿昌梅」は寿昌院自ら植樹したと伝えられている。梅まつりの最中であつたが、今年は寒い日が続いたので開花が遅れているそうである。その代わり蠟梅がまだまだ見頃であつた。茅葺屋根の茶屋・松連庵には七段飾りのお雛様や吊るし雛が飾ってあり、春らしく華やかであつた。松連庵前の庭に置かれたベンチで梅饅頭を食べて一休みした。



心字池と雪吊りと紅梅



松連庵と紅梅



雛飾り



吊るし雛

- ★ 百草園から京王線・百草園駅へ向かう道は松連坂という急坂である。スキーの滑降競技が出来るほどの急な坂で、原付バイクでは登れないだろうと思うほどである。その坂の途中に「ルイシャトレ百草園ヒルズ」というマンションがあった。9階建て、60戸が入る建物が4棟建っているが、丘の斜面に建っているため、各階が階段状になっていて、各棟の間に一直線に登る階段がある。恐らく300段はあるだろうという長い階段である。



若山牧水の歌碑の前で



坂の上のマンション

- ★ 百草園駅に着いたのは4時50分頃であった。15000歩ほど歩いたので皆さん大分お疲れで、駅のエスカレーターを利用したが、最高齢の金子さんだけは颯爽と階段を登って行かれたのには一同あつけにとられた。予定より大分遅くなったので高幡不動は次の機会に譲り、解散した。

俳句を頂きました。

牧水の 賞でし白梅 歌碑の背に
茅葺の 屋に吊り雛 戯れて

金子正男

春光や 多摩の川面の きらめきぬ
茅葺きの 軒にあまたの つるし雛
梅まつり 牧水ゆかりの 百草園

志賀 勉

モノレール 春の鶯を 飛翔する
大櫃と 静かに眠れ 土方歳三
急坂を あえぎし先に 梅の園
まだ咲かぬ 梅の茶屋にて 梅饅頭
つるし雛 すだれのごとく 雛の間に

桑田青三

手を触れし みつまたのはな 由来聞く
水鳥の 春の光に 集うかな
紅梅や 青き空背に ひかりをり

水野博司

写真と文 小島恕雄

参加者 金子正男、桑田制三、古賀良郎、小島恕雄夫妻、志賀 勉、
牧野昭夫、水野 聡、水野博司 以上9名